

うた・ものがたりのデザイン

—日本工芸にみる「優雅」の伝統—

2014年10月28日(火)—12月7日(日)

江戸中期の故実家、伊勢貞丈(1717-84)が記した『貞丈雑記』に、「硯箱・香匣・手箱その外蒔絵の絵様に[あしで書]と云う事あり。葦手書と書くなり。香包の紙などにもあし手書をするなり。あしでがきとは、古歌などを書くに文字と絵とを交ぜて書くなり。」とあります。「葦手」が何を表すかについては一言で語ることはできませんが、上記の一文から、文字と絵をとりまぜて和歌を表す蒔絵意匠のあったことが窺えます。

「夜桜蒔絵硯箱」は『貞丈雑記』※1が書かれたのと、同じ頃に作られました。金の梨子地に仕上げられ、雲がかかった月に桜が蒔絵と平

御所解文様小袖(源氏物語 若紫) 江戸時代・19世紀 株式会社 千總



夜桜蒔絵硯箱 江戸時代・17-18世紀 個人蔵

文※2で表されています。桜の幹をよく見ると、「あ」「た」「ら」という文字が隠されていることに気づきます。夜桜の絵と「あたら」の文字から、硯箱が「月のおもしろかりける夜、花をみて」と題された、「あたら夜

の月と花とをおなじくば、あらわれしらねん人に見せばや」の和歌を表わすことがわかります。作者は源信明(910-970)で、三十六歌仙の一人、歌は村上天皇の勅撰によって編まれた『後撰和歌集』巻三、春に選ばれています。

「あたら」とは惜しいことを意味し、明けてしまうのがおもしろいような夜、この月と花を、もののあはれのわかるどなたかにみせられたらいいのという気持ちがこめられています。源信明の和歌を知る人が見ると、単に夜桜ではなく、歌の意味がこめられている意匠であることがわかります。『貞丈雑記』の記した葦手書はこのような意匠をさすといえます。

さらに、そこにとどまらないのが文芸デザインの奥深さです。実はこの歌の「あたら夜の」の句は『源氏物語』第十三帖、明石において、明石の入道が、思いをめぐらせた結果、一人娘のもとに源氏が訪れるよう誘う手紙の文言として引かれています。物語には「忍びてよろしき日見て、母君のとかく思ひわづらふを聞き入れず、弟子どもなどにだに知らせず、心一つにたちみ輝くばかりしつらひて、十三日の月のはなやかにさし出でたるに、ただ、あたら夜の、と聞えたり」と書かれます。古歌やその一部を後の人が文章に引用したものを引歌といい、和歌の持つイメージを文中に取り込む役割を果たします。『源氏物語』を知る人にとっては硯箱は『源氏物語』明石の意匠ともなります。

もう一点、「御所解文様小袖」(江戸後期 株式会社千總)を見てみましょう。右袖には屋敷の簀の子に雀が飛び去った後の鳥籠を、右裾には桜樹の影に源氏の車が表されています。『源氏物語』を知る人には、これが「若紫」の帖を表す意匠とわかります。工芸作品の意匠に歌の文言の一部を引いたり、物語を示す特定のモチーフや風景を描くことは、文芸における引歌と同等の効果を作品に与えているとわかります。

ここにとりあげたのは僅かな例にすぎませんが、こうした文芸を源とする意匠は平安期から見られ、料紙装飾・蒔絵調度・金工、小袖・陶磁器などの意匠に受け継がれていきました。「うた・ものがたりのデザイン」展では、文芸に関わる雅な意匠の流れを、約20件の指定文化財を含む130余件の名品を通してわかりやすくご紹介したいと思えます。

(土井久美子)

※1 宝暦13年(1763)から書き始められ、没後、弟子の校訂により天保14年(1843)刊行。

※2 蒔絵は漆で図を描き金粉を蒔き、磨いて仕上げる技法、平文は金属の薄板を文様に切り出し、漆の面に貼り文様を表す技法。